エジプト新王国アメンヘテプ３世治世末期の大型岩窟墓（TT47）と周辺の岩窟墓の調査研究
―エジプト、アル＝コーカ地区、2024年・第15次調査―

近藤　二郎　早稲田大学名誉教授

The Research on the large rock-cut tomb (TT47) at the end of the reign of Amenhotep III and the surrounding tombs:
― The 15th season (2024) of the work at al-Khokha in the Theban Necropolis, Egypt

KONDO, Jiro　Professor Emeritus, Waseda University

1. はじめに

本年は2024年10月30日から12月5日まで37日間、第15次調査を実施した。本調査は、令和６年度科学研究費・基盤研究(B)(一般)、研究課題「古代エジプト、ネクロポリス・テーベにおける岩窟墓のライフ・ヒストリー研究」課題番号：24K00145、研究代表者：近藤二郎(早稲田大学名誉教授)によって実施されたものである。

昨年度の第14次調査は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で３年９ヶ月にわたる長期間の中断を経て2023年９月23日に再開され、同年10月25日迄の33日間であった。

2. 調査概要

第15次調査は、ウセルハト墓(TT47)前室内部に厚く堆積した砂礫の除去作業とコンスウエムヘブ墓(KHT02)の墓内壁画の保存・修復作業の二つを主に実施した。ウセルハト墓の前室の天井は、ほとんどが崩落しており、巨大な石灰岩ブロックとして前室内部

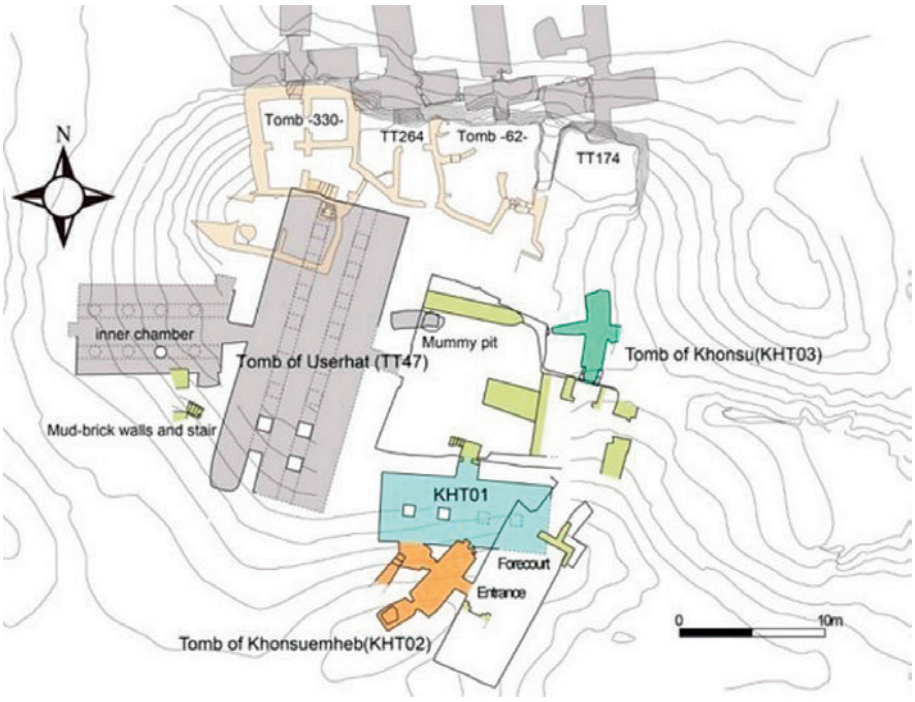

図１　アル＝コーカ地区岩窟墓配置図

に残されている。第18王朝アメンヘテプ3世治世（在位：前1390～前1353年頃）の30年以降になるとテーベ西岸では、前室に柱を多く持つ構造の大型岩窟墓の造営が開始され、岩窟墓内部には壁画ではなく、レリーフ装飾が施されるようになる。こうした形式の墓やレリーフを主体とする墓内装飾は、メンフィスの墓作り職人たちの伝統であることから、アメンヘテプ3世治世末期にテーベ西岸に突然として出現した大型岩窟墓は、テーベの職人の手になるものではなく、王がメンフィスから招聘した職人たちによって建造されたものと考えられる。メンフィスの墓は、良質な石灰岩の切石を積み上げて建造されているが、テーベ西岸にアメンヘテプ3世治世末期からアメンヘテプ4世（後のアクエンアテン王）治世初期にかけて造営されたアメンエムハト・スレル墓（TT48）、ラモーゼ墓（TT55）、ケルエフ墓（TT192）、アメンヘテプ墓（TT-28-）などの大型岩窟墓は、所謂「クルナ石灰岩層」（標高約88～90 m）を掘削されている。この石灰岩層は、脆弱で強度が不足している。そのため、アメンヘテプ4世の治世初期にかけて造営されたテーベ西岸の大型岩窟墓は、いずれもクルナ石灰岩層に造営されており、石灰岩の強度が脆弱なため、これらの墓の前室や奥室の天井部分が崩落していることが多い。

3. ウセルハト墓（TT47）前室内部の堆積砂礫の除去

ウセルハト墓の入口上部のリンテル（まぐさ石）には大きな亀裂があるため、崩落の危険性があったことからウセルハト墓の前室部分を床面までクリーニングすることは困難であった。リンテルを支えるために鉄製アングルを組立て、さらにリンテルの崩落を防ぐ保護措置と入口鉄扉を完成させることで、これによりウセルハト墓入口に厚く堆積していた砂礫の除去作業が可能となった。昨年の第14次調査でリンテル下部の堆積砂礫を床面まで完全に除去したところ、入口の内側の南北壁に彩色された碑文と被葬者の図像を発見した。特に北側の壁面の保存状況は良好であり、壁面の下部には色彩が鮮やかな装飾帯が残り、その上部には黄色の背景に縦7行の碑文が残されていた。

第15次調査では、当初、第14次調査で砂礫を床面まで完全に除去した入口部分から前室中央の奥壁まで東西に直線状に砂礫除去作業を実施する予定であったが、入口部分以外の前室には、まだ2 mほどの砂礫の堆積があり、南側では壁の断面が5 m以上にも達するため、断面の崩落が懸念され作業員の安全のために、前室中央より北側部分を上部から堆積砂礫を除去することにした。砂礫除去作業中、幾つかの崩落した前室天井部分の巨大石灰岩ブロックが発見されたが、表面にレリーフや碑文がないことを慎重に吟味した上で、ハンマーとノミとを使用して巨大な石灰岩ブロック（塊）を細かく粉砕して除去する作業を繰り返した。かなりの堆積砂礫の除去を実施した終了時点で、まだ床面上1 m半ほど残された。

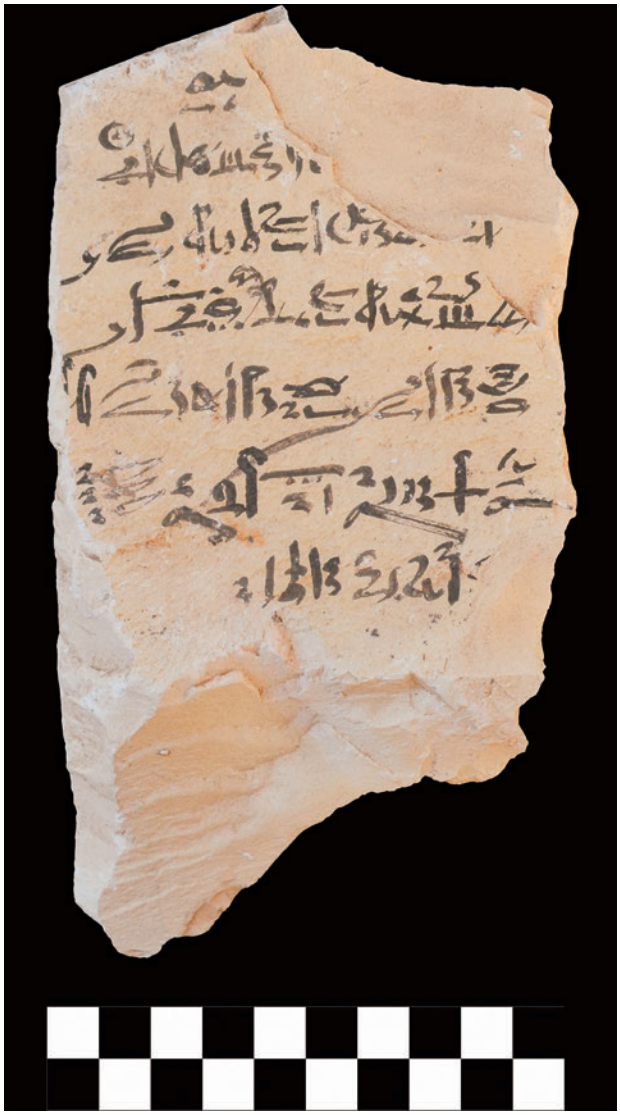

図2 「アメンエムハト1世の教訓」の冒頭部分が記されたヒエラティック・オストラコン

4. 出土遺物

ウセルハト墓（TT47）前室堆積砂礫からの主な出土遺物としては、新王国時代～末期王朝時代の土器片、ファイアンス製や素焼きの土製の第3中間期～末期王朝時代のシャブティ像片、所有者の名が判明した葬送

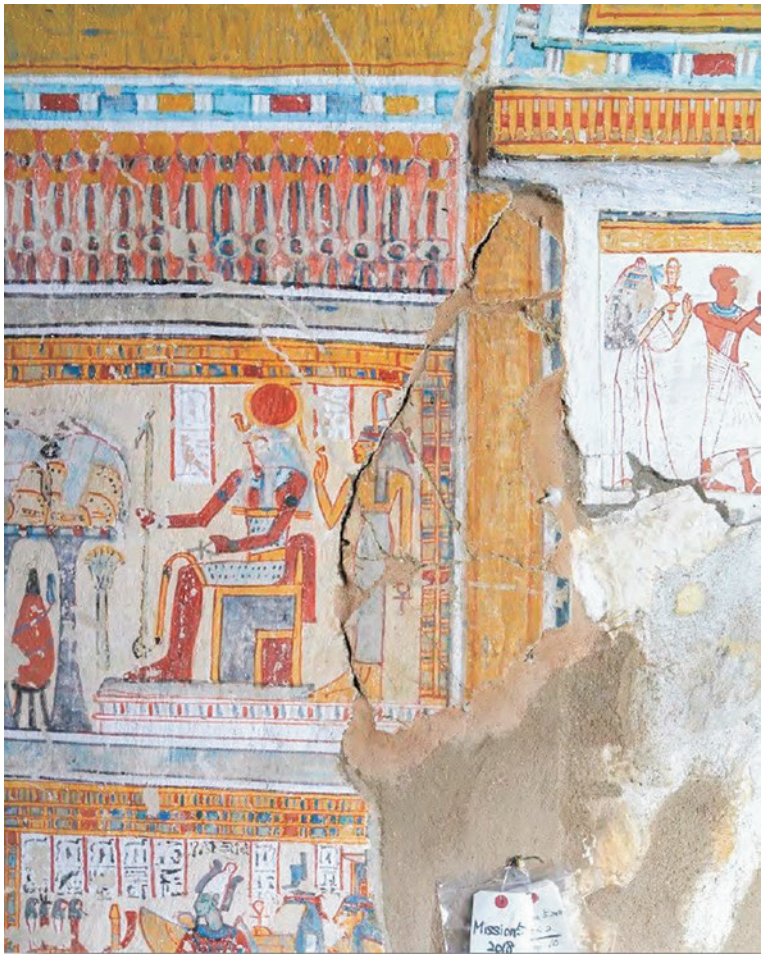

図3 コンスウエムヘブ墓(KHT02)奥壁中央南側の壁面の保存修復(5つの破片の充填)。

用コーンにメンチュウネケト(D. & M. #357)とTT47の被葬者ウセルハト(D. & M. #406)の2種がある。また、第3中間期〜末期王朝時代のカルトナージュ片が出土した。

第15次調査で発見された遺物の中で特筆すべきものとしては、石灰岩にヒエラティック(神官文字)が記された「ヒエラティック・オストラコン」であった(**図2**)。石灰岩の表面には、7行のヒエラティックの銘文があり、2行目と3行目には、一部が欠損しているが2つのカルトゥーシュ(王名枠)が認められ、2行目が「即位名」、3行目が「誕生名」で、中王国第12王朝初代のアメンエムハト1世(在位：前1939〜前1910年頃)のものであることが判明した。その後、関連する資料を調査したところ、このヒエラティック・オストラコンには、「アメンエムハト1世の教訓」の冒頭の部分が記されていることが判明した(Geoga 2021)。アル＝コーカ地区の発掘調査で、文学テキストを写したヒエラティック・オストラコンが出土したのは初めての例である。ヒエラティックの書体から見て本オストラコンは新王国第18王朝に書かれたものと推測される。この種のヒエラティック・オストラコンが、書紀の筆写用オストラコンであったかは現時点で確証はないが、アル＝コーカ地区付近の王の葬祭殿に付属する書紀学校で使用された可能性もあるが、どのような経緯でウセルハト墓(TT47)の前室内部の砂礫から出土したかは、今後の研究の進展に待たれる。

5. コンスウエムヘブ墓(KHT02)壁画の保存修復

コンスウエムヘブ墓(KHT02)内部の壁面の保存修復作業も継続して実施している。第15次調査では、コンスウエムヘブ墓内部で、これまでに集められた大小の彩壁画片のクリーニングと表面の顔料の固定、裏面の整形作業などを実施した上で、互いに接合が可能な破片を並べ、確実な破片から壁面の欠損部分に戻す作業をおこなった。**図3**は、奥壁中央南側の女神の身体の部分とその背後を崩落した破片を充填して復元し

図4　接合され充填された5つの崩落彩壁画片

たところ。**図4**は、充填に使用した5つの崩落彩壁画片を示す。

なお、今回のアル＝コーカ地区第15次調査（2024年10月～12月）に参加した者は、以下のとおりである。近藤二郎（早稲田大学名誉教授・エジプト学）、菊地敬夫（エジプト日本科学技術大学 Egypt-Japan University of Science and Technology：E-JUST 教授・エジプト学）、前川佳文（東京文化財研究所主任研究員・保存修復学）、宮崎澪菜（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程・エジプト考古学）、進藤瑞生（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程・エジプト考古学）、Daniela Maria Murphy（保存修復学）、Stefania Franceschini（保存修復学）、José Ignacio Forcadell Utrilla（岩盤工学）。また、エジプト観光・考古省（MoTA）から本調査にインスペクター（査察官）として Kasem Hagag と Hana Ahmed Hassany の2名が調査期間中に派遣された。

■参考文献

・Geoga, Margaret 2021, “New Insights into Papyrus Millingen and the Reception History of *The Teaching of Amenemhat*”, The Journal of Egyptian Archaeology,
・Helck, Wolfgang 1969, *Der Text der “Lehre Amenemhets I. für seinen Sohn”*, Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
・Kondo, Jiro and Nozomu Kawai 2017, “Discovered, Lost, rediscovered: Userhat and Khonsuemheb”, *Egyptian Archaeology* 50 (Spring), Egypt Exploration Society, London, pp.22–26.
・近藤二郎・吉村作治・河合望・高橋寿光・福田莉紗　2021「第13次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第27号、18–35頁。
・屋形禎亮　1978「アメンエムハト1世の教訓」杉勇他、『古代オリエント集』筑摩世界文學大系1、筑摩書房、pp.527–529